様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月１８日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００８～２０１０
課題番号：２０５００６６５
研究課題名（和文） 伝統的資源循環型生活指針の今日への翻訳・実践

研究課題名（英文） Translation and Practice of the Traditional Resource Circulation Type Life

研究代表者
宮崎　清（MIYAZAKI KIYOSHI）
千葉大学・名誉教授
研究者番号：９０００９２６７

研究成果の概要（和文）：
本研究は、日本の各地において育まれてきた「資源循環型生活」の実相を、文献調査・現地調査に基づき多面的に採集し、それらを生活者が、今日に創造的に再生・実践するための指針を導出することを目的としたものである。調査・考察の結果、「資源循環型生活」構築の指針として、以下の３つを導出した。①生活者自らが地域の自然を体得する機会を創出する。②地域の自然資源の利活用の方法を共有する機会を創出する。③地域の自然資源の利活用経験に基づいた生活理念を伝える。

研究成果の概要（英文）：
This research aims to derive the real state and characteristic of the traditional resource circulation type life that has been succeeded to as symbiosis with nature in Japan before, and to derive the indicator of “designing a living” in the future. It is a fundamental study for “designing a living” applied for our particular way of living of symbiosis with nature in the region as “another development.” It is clarified that following three indicators of “designing a living” are necessary for constructing resource recycling life style. (1) Creation of opportunities to feel and to learn nature in the region. (2) Reconfirmation of opportunities to use natural resources of the region. (3) Inheritance of the living principles based on experiences to use natural resources of the region.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 平成２０年度 | １，８００，０００ | ５４０，０００ | ２，３４０，０００ |
| 平成２１年度 | １，３００，０００ | ３９０，０００ | １，６９０，０００ |
| 平成２２年度 | ４００，０００ | １２０，０００ | ５２０，０００ |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | ３，５００，０００ | １，０５０，０００ | ４，５５０，０００ |

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般
キーワード：生活造形・生活財・資源循環型生活

１．研究開始当初の背景

今日、さまざまな地球資源の枯渇が深刻化の一途を辿っている。この危機的ともいえる問題を解決する方策のひとつが「資源循環型生活の再生・創生」である。

そのためには、自然と共生した生活が展開されてきた地域における「資源循環型生活」に関する具体的な知恵の集積を徹底するとともに、その今日的翻訳(創造的展開)を行い、社会に向けての実践的な生活提案をなす必要がある。

しかしながら、これまで、日本各地で培われていたかつての「資源循環型生活」を今日的な視座に基づいて再生・創生するための具体的・実践的な研究は、ほとんどなされてこなかった。

２．研究の目的

本研究は、日本の各地において育まれてきた「資源循環型生活」の実相をインテンシブな現地調査を通してその諸事実を多面的に採集するとともに、それらを今日の生活に創造的に再生・創生・実践するための具体的方策を導出することを目的としたものである。

３．研究の方法

本研究では、研究代表者らとすでに密接な協力関係が築かれている千葉県各地をはじめ、福島県三島町、山梨県身延町、新潟県山北地域、京都府京都市などの日本各地の公的機関・民間団体・生活者と協働して、「資源循環型生活」の実相に関するデータの集積を図った。

また、1684 年に著された農業指南書である『会津農書』を取り上げ、江戸期の会津地域の農家において行われていた「資源循環型生活」の実相を明らかにすることを目指した。

４．研究成果

(1) 実地調査による「資源循環型生活」の実相に関するデータの集積

実地参与観察に基づき、伝統的な「資源循環型生活」の諸要素を抽出した。それぞれの地域において収集したデータの概要は、以下の通りである。

①千葉県各地における実地調査結果

多様な地域特性を有する千葉県各地においては、古くから、地域固有の気候・風土に対応して、それぞれの地域に固有な「資源循環型生活」が展開されてきた。例えば、海岸部・平野部・丘陵地帯を有する九十九里地方（千葉県山武市）の海岸部では、里海としての海と一体化した生活のなかで、「資源循環型生活」がなされてきた。また、同市の平野部では稲作・畑作を主要な生業してきた生活のなかで、丘陵地帯では里山としての山との緊密なかかわりのなかで、それぞれに、「資源循環型生活」が行われてきた。これらの地域に展開されてきた「資源循環型生活」の具体的事例と知恵を収集・整理し、以下の図に示す「資源循環型生活」の特質を把握した。

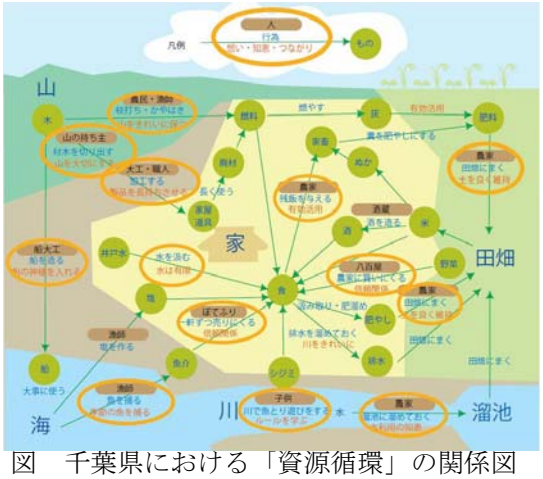


図　千葉県における「資源循環」の関係図
（千葉県山武市を事例として）

②福島県三島町における実地調査結果

福島県西部に位置する三島町は、典型的な山村のひとつである。冬には２メートル以上もの雪が降り積もる豪雪地帯でもあり、当該地域の家々では、古くから、冬の農閑期の家内作業として、天然素材を活用したさまざまなものづくり・生活用具づくりが行われてきた。1983 年、この町に伝えられてきた自らの手による生活用具づくりの生活文化こそこの地のアイデンティティであるとの認識が町民の間に共有され、町をあげての生活工芸運動が始められた。以降、伝統的な「資源循環型生活」を規範とした生活工芸運動が、箕島町における地域づくり活動の中核に位置づけられ、今日まで確実に継承され発展してきている。最近では、生活工芸運動の基底にある自然との共生生活の理念が隣接する奥会津地域の町村にまで波及し、それらの地域においても「資源循環型生活」の価値が見直されつつある。また、都市地域に居住する人びとが三島町における「資源循環型生活」に準拠した生活工芸運動の価値を見直し、その成果品が都市居住者のなかでも広く使われるようにもなっている。とりわけ高齢男女によって担われている生活工芸運動が人びとの間で生き甲斐にまで成長していることは、今後の「資源循環型生活」の指針導出に当た

って示唆する点が多い。

③山梨県身延町における実地調査結果

山梨県身延町中富地区は、古くから、和紙の産地として知られてきた。この地域においては、楮や三椏を栽培し、富士川に注ぎ込む支流のきれいな水を利活用して和紙を漉く伝統に加え、既に使用された和紙を回収・採集して原料とし、新しく漉き直す和紙再生が行われている。また、地域で生産された和紙を用いて自ら書や絵を描くとともに、さまざまな和紙工芸品を製作する事業も展開されている。小中学校の卒業証書には、子どもたち自らの手漉き和紙が用いられてもいる。まさに地産地消の活動が「資源循環型生活」と一体化して展開されている。本研究においては、伝統的なものづくりとしての和紙の生産、古和紙の透き直しによる和紙造、ならびに、それらを生活のなかで生かしていく「資源循環型生活」の諸要素を収集した。

④新潟県山北地域における実地調査結果

新潟県村上市山北地域は、新潟県の最北部、山形県との県境に位置している。日本海から運ばれてくる冷気は、冬季には大量の雪をこの地にもたらす。山深い山熊田の集落では、古くから、雪解け水のなかで育った科の樹を採取して、その樹皮を繊維とした科布織りを行ってきた。男たちは科の樹の栽培・伐採・運搬を、女たちは糸づくり・織り・生活用具づくりを、それぞれに担ってきた。木綿栽培ができない北方の地では樹皮を活用した糸づくり・布づくりが古くから行われてきたが、山北町は今日でもその伝統的な生活文化を継承してきている。本研究では、科布づくりの材料採取から使用・廃棄に至るまでの「資源循環型生活」の諸側面を把握した。

⑤京都府京都市における実地調査結果

京都府京都市は、いうまでもなく、日本を代表する古都である。古都・京都における町屋の人びとの日々の生活のなかでは、固有の「資源循環型生活」の知恵が創生され継承されてきた。道路に対して間口が狭く、奥行が深い短冊型の敷地に軒を接して建つ町屋では、表から奥まで土間を通し、その一方に部屋をほぼ一列に並べ、敷地のほぼ中央に坪庭を配置することによって、通気性と採光を向上させてきた。坪庭には石や植物などを配し、通りに面した公的空間と奥の私的空間を区分してきた。本研究においては、このような町屋の構造にみられる自然を生かした生活文化の諸要素の集積を行った。

(2)『会津農書』に基づく「資源循環型生活」の実相に関するデータの集積

1684 年に著された農業指南書である『会津農書』の文献解析においては、江戸期の会津地域の農家において行われていた「資源循環型生活」の実相を明らかにすることを目指した。本書からは、自然の様態を観察しその変化から季節の移り変わりや日々の気候の状態を敏感に感じ取るための知恵、人の手によって自然のバランスを崩さないための知恵、およそ生活に必要なものはその素材から自らの手で栽培もしくは山野から採取してさまざまな生活用具の製作を行う知恵、日々の消耗品・生活用具をできる限りむだなく使用するための知恵、使い尽くされて寿命を迎えた生活用具や汚水などを肥料として大地に還していくための知恵などを、抽出した。そして、このような知恵を実践し、生活者が積極的に自然とのかかわりを持つことが、「資源循環型生活」を構築する基盤となることを確認した。

また、上記の考察の結果、日本の地域社会にみられる伝統的な資源循環の要素は、「いただく」「むだをなくす」「いたわる」「やくだてる」「つかいつくす」「おかえしする」「いつくしむ」といった７つの知恵を表す「ことば」で整理・把握することが可能であることを明らかにした。これら７つの「ことば」の意味は、およそ以下の通りである。

①「いただく」

「いただく」という「ことば」には、「自然から材料を調達する際の知恵」が内包されている。伝統的な「資源循環型生活」には、自然が再生する速度を超えない範囲で、身の周りの自然から継続的に材料を採取することがいかに重要であるか、また、自然から材料を採取する際には、一方的に人間の要求・欲求によって採取するのではなく、常に感謝の念をもって適量を採取しなければならないことが内包されている。この知恵は、例えば、『会津農書』では、薪の採取に関する生活規範などに確認することができた。福島県三島町の生活工芸運動や新潟県山北地域における科布織りの文化には、自然からのいただきものとしての素材を生活用具づくりに活かし、自然の造形の力強さと美しさを讃えながら生活用具づくりに反映していく姿勢がみてとれる。それらの品々は、まさに、「いただく」の精神が表出されたものにほかならない。

②「むだをなくす」

「むだをなくす」とは、「ものの製作・生産過程において生じる副産物を積極的に活用し廃棄物を減少させる知恵」である。例えば、『会津農書』では、薪や油を大切にするだけではなく、かまどや便所のつくり方を工夫することによって、熱源や光源としての燃料の「むだをなくす」生活行為を確認することができた。京都の町屋における通し土間や坪庭にみられる採光と風通しの工夫も、自然をそのままに活かして生活空間を構成して「むだをなくす」知恵に相違ない。また、先人たちは、生産活動における副産物を生活のなかでむだなく活用する知恵を培い、ひいて

は、そのことを通じて、地域における物質文化の基盤を形成してきたといえる。千葉県山武市の稲作を生業としてきた家々では、刈取り・脱穀を終えた藁を日常生活や冠婚葬祭の非日常的生活のなかで、また、子どもたちの遊戯のなかでなど、およそ生活のあらゆる場面で活用する文化が培われてきた。その様相は、藁づくりこそが稲作の主目的であったかと思わせるほどである。藁はコメづくりの副産物に相違ないが、「むだをなくす」理念に裏打ちされて一本の藁に至るまで利活用されてきた。「むだをなくす」という行為が、文字通り、廃棄物を減少させることのみにとどまらず、地域社会を構成するひとりひとりの生活づくりにつながっていたことはきわめて重要である。

③「いたわる」

「いたわる」とは、「ひとつのものを大切に徹底的に使っていく知恵」である。ものを「いたわる」ことによって、日本においては、生活者ひとりひとりが主体的に廃棄物の減量化を生活規範にするとともに、代替品を得るための資源をも削減し、また、ものに対する愛着やものを丁重に扱う精神を育んできた。例えば、『会津農書』においては、農具の手入れなどにその様相をみてとることができる。生活工芸運動を展開している福島県三島町では、100 年前に製作されたといわれるミヤマカンスゲを細く綯った山菜採りの腰籠、山葡萄の蔓で編んだ背負い籠などが、今日でも使用されている。それらには、補修に補修を重ねてきた痕跡がうかがわれる。古びたから捨てる、破れたから廃棄するなどの生活スタイルは、この地にはみられない。先代が製作したものを「いたわる」精神が、100 年間使用し続けられてきた生活用具のなかに彷彿としている。時間と時代を超えて、「いたわる」想いが継承されている。

④「やくだてる」

「やくだてる」とは、「別の用途に活用する知恵」を示す「ことば」であり、多用・転用の工夫が包含されている。使い手が工夫を施すことで、ひとつのものでも、実に多様な目的に対応させ、生活のなかで利活用することが可能である。「やくだてる」知恵の活用は、ひとりひとりが、生活のなかで主体的に省資源化を進め、ブリコラージュを行っていく知恵でもある。

⑤「つかいつくす」

「つかいつくす」とは、「使用を終え寿命が到来したものでも積極的に使用する知恵」である。いわば、リサイクルの知恵とも連動したものの使い方である。今日においてはゴミ・廃棄物と称して安易に反故にしてしまうものまで、かつては、ひとりひとりが資源として認識し、使用し続ける知恵を培ってきた。ほころびが生じれば、接ぎを当て、一部を新たな素材に置き換えるなどして、人びとはものを「つかいつくす」ための補修の技術を開発してきた。ひとりひとりが積極的に「つかいつくす」工夫を身につけることで、身の周りにある多くのものが資源となり得ることが示唆された。

⑥「おかえしする」

「おかえしする」とは、「ものを自然に還元する知恵」である。かつては、自然素材が用いられてものづくりがなされてきたがゆえに多くのものを容易に自然に還すことができたが、「おかえし」するものは、必ず「いたわり」「やくだて」「つかいつくした」ものでなければならなかった。『会津農書』にみられる肥料づくりは、まさに、大地に還し新たな植物・命を育てる知恵であった。肥料が養いと表現される所以はここにある。千葉県山武市の平野部に展開されてきたさまざまな藁の生活用具は、日常的なものであるにしろ、非日常的なものであるにしろ、最終的には土に戻されて新たな稲を育てる養いとされた。土から生まれたものを土に「おかえしする」ことが当然の所作として行われてきた。また、その所作には、自然が人に与えてくれたことに感謝し、自然に「おかえしする」ことも含意されていた。さらに、生活用具にはそれを制作した人の魂が内在しているという観念が共有されていたから、生活用具を土に還すに際しては、製作者の魂・霊に対しての供養、同時に、生活用具が特定の機能を果たし続けてきてくれたことへの供養が行われてきた。「いただく」「おかえしする」の２つの観念・所作は、時空を越えて人と自然とが一体化していたことの証左にほかならない。

⑦「いつくしむ」

「いつくしむ」とは、「自然環境や社会環境をよりよくするための知恵」である。自然環境は、人間が一方的に管理するものではない。それは、人が、いつくしみの心をもって積極的にかかわりながら共生することを通して育んでいくものである。「いつくしむ」という「ことば」には、「資源循環型生活」とは、ひとりひとりがより豊かな自然環境を育んでいくという積極的な姿勢が内包されている。このことは、自然を畏怖・敬愛しつつ先人から受け継いできた約束事や規範にさまざまなかたちであらわれている。こうした約束事や規範の多くは、個人や共同体で遵守されるべきこととみなされ、人びとの間に共有されていた。また、「いつくしむ」理念・規範が人びとの間で共有されることにより、地域社会におけるコミュニティが維持されてきた。例えば、『会津農書』では、樹木の植え方などに、人びとの自然を「いつくしむ」心、コミュニティを形成していく人びとの当たり前の規範・所作が顕著に描かれている。

以上にみてきたこれら７つの「ことば」の

基底には、自然との共生を積極的に図る生活者の姿勢が内包されている。今後、地域社会における「資源循環型生活」を構築していくためには、地域に伝えられてきた生活者自身による「資源循環型生活」の知恵の再認識・再確認を徹底し、それに基づきながら日々の生活における実践をなすことが、何よりも求められる。

さまざまな環境問題に起因して地域社会の崩壊が叫ばれる今日、地域社会における真に豊かな「生活づくり」にあっては、上述した伝統的な「資源循環型生活」の知恵を至極今日的な価値、グローバルな価値そのものとして認識し、その主体的・積極的な実践が求められている。地域主義の理念にとどまることなく、地域と地域とがつながる理念、さらには、地域が世界につながる観念を、地域の人びとが共有することが求められる。還元すれば、グローカル（local＋global）な視点が欠かせない。そのためには、ゴミ・廃棄物を前提とした資源循環システムに生活者が依拠するのではなく、自らの地域における資源循環の行為を上述の７つの「ことば」と照合・点検・把握し、生活者自らが内発的・積極的に「資源循環型生活」を実践・推進していくことが肝要である。なぜなら、自然と共生する生活は、人びとが、積極的に自然と対峙するなかで芽生えた自然に対する感謝の念こそがその基底に据えられているからである。

最終的に、本研究では、以下の３つの資源循環型生活の指針を導出した。

①地域の自然を知る機会を創出する：

地域に暮らす人びとが、当該地域の独自の自然環境を五感を通じて感じ取る機会を創出することが必要である。自然との遊離が進む今日、自らがどのような自然のなかに暮らしているのかを見定める目を育てることが重要である。

②地域の自然資源の利活用方法を伝える機会を創出する：

地域ごとに異なる生活文化は、その地域のさまざまな資源の価値評価体系そのものであるといえる。その価値評価体系のなかでの自然資源の利活用方法を再確認し、地域で共有していく活動が必要である。

③地域の自然資源の利活用経験に基いた生活理念を伝える：

地域の自然資源の利活用方法を再確認する際には、「いただく」「むだをなくす」「いたわる」「やくだてる」「つかいつくす」「おかえしする」「いつくしむ」という７つの「ことば」で整理される行為について、それぞれの行為に内包された生活者の自然に対する理念・規範を正しく再確認し、地域で共有していく必要がある。

かつてみられた「資源循環型生活」は、今日、地域文化の画一化や過疎・高齢化などが進むなかで急速に消えつつある。本研究は、それらが消え去らないうちに、そのリアルな実像の集積を図り、各地に培われてきた「資源循環型生活」の再生・創生の重要性を広く人びとに喚起するものである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）


①宮崎清、植田憲、大鋸智：江戸期の会津地域の農の生活にみられる資源循環型生活 ―『会津農書』にみる自然との共生の姿、デザイン学研究、第 58 巻、第１号、pp.31-40（2011）

②宮崎清、植田憲、大鋸智：伝統的ものづくり羽越しな布にみる資源循環型生活の要素の抽出 ―現代における資源循環型社会の志向と比較して、デザイン学研究、第 57 巻、第 6 号、pp.9-18（2011）

③宮崎清：柳宗悦と伝統工芸文化―柳宗悦の生涯と思想展開の軌跡 ADCS(Bulletin of Asian_Design Culture Society、No.5、pp.481-494（2010）

④Wang Shu-huei、Hwang Shyh-huei、Miyazaki Kiyoshi：Empathic Design、ADCS(Bulletin of Asian Design Culture Society)、No.5、pp.421-430（2010）

⑤Naoto Suzuki：Designing a Living and Evaluation for Regional Reinvigoration、ADCS (Bulletin of Asian_Design Culture Society)、No.5、pp.159-169（2010）

⑥ Akira UEDA, Satoru OOGA, THE CULTURE OF “*MOTTAINAI*” SEEN AS SYMBIOSIS BETWEEN JAPAN’S CERAMIC, THE SCIENCE OF DESIGN, Vol.57, No.1, pp.75-84 (2010)


［テレビ放送・ＤＶＤ］


①宮崎清：藁の文化―欠かせない日本の意匠、放送大学ＴＶ特別講義、2011 年 6 月 11 日（土）および 8 月 6 日（土）放送、（44 分）


６．研究組織


(1)研究代表者

宮崎　清（MIYAZAKI KIYOSHI）

千葉大学・名誉教授

研究者番号：９０００９２６７

(2)連携研究者

鈴木　直人（SUZUKI NAOTO）

千葉大学・大学院工学研究科・教授

研究者番号：９０５６８２３９

植田　憲（UEDA AKIRA）

千葉大学・大学院工学研究科・教授

研究者番号：４０３４４９６５